

花瀬望比公園

T1 隈元 達雄

手許に1枚のコピーがある。昭和44年10月18日発行の鹿児島銀行の“旧友会報”第3号とある。義兄が同行に勤務していて手に入れたものを、コピーしてもらったものだ。私たちの父もその昔、鹿児島銀行の前身 第四百十七銀行に働いていたが召集されフィリッピンで戦死した。

その父との思い出を“旧友会報”に書いてくださったのが父の少し先輩である野村健一さんである。「故情の記」と題して友人、同僚3人のことを書いておられる。その中の父の項は次のような文章で始まっている。少し長くなるが引用してみる。

「隈元栄治君もわすれ難い銀行の人である。昭和19年の初冬二度目の応召で西駅頭に君を送った日、陸軍少尉の軍服姿りりしく勇躍出征の途についた君をほうふつとして今でも憶い出すのである。戦争は明らかに末期的症状を呈していた。(中略)」そして続く「門司駅に集合、多分満州に渡る部隊に編入されるだろうくらいの情報しか分かっていなかった。その後、フィリッピンに転進したらしいという風の便りを聞いたきり消息は絶えた。後日談ではルソン島をあちらこちら追われ、衣も食も不自由の中に戦死したらしい、昭和24年戦死公報の白木の箱は一片の位牌しか入っていなかったそうだ。(中略)昭和42年11月、比島遺骨収集団が結成され、鷹野頭取が渡島されると聞き、隈元君の霊前に線香を、また奥様から好きであった煙草を供えて頂いた。(中略)忘れもしない年も迫った12月29日の朝、師走の空には珍しい晴れた日和、遺骨を出迎えるべく私は埠頭に立っていた。海釣りの好きだった君は、思いもかけずかって親しんだ海から還って来た。冬の朝の柔らかい陽の光りが地上をぬくめ、風をいたわり凧の静かな海面の小波は夢に描いた故山の風物に『今、戻した』と囁きかけているようだった。『おやっとさあ、栄治さん』自衛隊の吹くラップも物哀しく、弔銃の響きも哀しかった。(中略)越えて4月20日、これらの遺骨は本土の南端開聞山麓花瀬海岸の砂丘に場所を得て、永遠の眠りに就いたのである。(中略)その埋骨の日、鹿銀旧友会を代表してはからずも私は式に参列した。同君とのつきせぬえにしに感謝した。その日はのどかな晩春の日和で春蟬が松の木の中に鳴き、浜辺の潮騒は海上千九百キロの比島に語りかけているようだった。花束を長方形の墓石の周囲に捧げて感慨深く黙祷した。この一瞬に万物は無に帰し、君が踏んだ土の感触の暖からむことを祈るのだった」

私は始めてこの文章を読んだとき涙がとめどもなく出て、なかなか先に進めなかった。そして何回も読み返した。亡くなった父のことをこんなにも思い、

しかも名文で偲んでいただける方がおられたなんて、私たち遺されたものにとって最高の贈りものである。

その昭和42年から43年頃、私は北九州に住んでいて母からの便りでそのことは知ってはいたが、慰霊祭の行われた花瀬望比海岸に行くことは叶わなかった。やっと行けたのは、鹿児島に帰り仕事を始めて少し落ち着いてからのことである。43年からはかれこれ20年近く経っていた。その時のことで一番印象に残っているのは、遙かな海の向こうのフィリッピンを眺望する“母と子の像”であった。そこに自分たちの姿とりわけ母の想いを強く感じた。それから何回か行ったがいつも同じ思いである。

ここには、フィリッピン方面での戦死者47万6千有余の御霊が祀られており、1,900Kmの天空の先を望んでいる。

そんな花瀬望比海岸に思いもかけない映画のスクリーンで出会った。私たちの男声合唱団楠声会が劇中歌を歌った「北辰斜めにさすところ」の映画の中である。この映画は鹿児島大学の前身である旧制第七高等学校造士館が中心になっており、旧制七高、五高の対抗野球試合を通じての熱い想いが描かれている。この映画の中で私たちは「北辰斜め」と「楠の葉末」の二曲を歌っている。三国連太郎や緒方直人など芸達者な俳優陣が好演している。

この冬、鹿児島でも封切られ私も観客の一人となった。映画の後半あたりだったろうか、三国連太郎扮する主人公が久しぶりに鹿児島を訪れ、あちらこちらまわるなかに、花瀬望比海岸が映しだされた。主人公が七高時代の先輩を偲ぶシーンである。“母と子の像”もしっかり映しだされた。

映画のなかにひきずり込まれそれまでも涙が滲みしかたのなかった私は、そのシーンを見てからは、自分の想いも重なり最後まで涙の乾くことがなかった。

春の陽気に誘われて久しぶりに“花瀬望比公園”に行ってみたくなった。

(2008, 8月楠声会会報夏期号に掲載)